

ブラツキーの話（梨木香歩）

小山 明里



一 作者と作品について

梨木香歩は一九五九年鹿児島生まれの小説家。英国に留学し、児童文学者のベティ・モーガン・ポーエンに師事した。『西の魔女が死んだ』で日本児童文学者協会新人賞、新美南吉児童文学賞、小学館文学賞を、『裏庭』で児童文学ファンタジー大賞を受賞した。その他の作品として『りかさん』『家守綺譚』などがある。

この作品は、教科書のための書き下ろし作品である。『ひろがる言葉 小学国語 6上』（教育出版、二〇一一年）に掲載された。

「ブラツキーの話」は『西の魔女が死んだ』へ続く作品となっている。『西の魔女が死んだ』では、まいは中学二年生になっており、不登校になっている。

二 叙述について

夏だからということもあるだろうけれど、ぞくぞくとする怪談話は、今いる現実の世界とはちがう場所に入っていくような感覚を与えてくれる。

「入っていくような感覚」とあり、実際に現実とちがう世界に行くのではなく、あくまで擬似的な感覚である。これから物語が始まると

いう場面設定。「与えてくれる」とあり、受身形であるので、怪談話（ママの話）によって主人公のまいは違う場所（過去？）に入っていく感覚を覚えている。「夏だからということもあるだろうけれど」から、夏だから、という言葉で怪談話のはやっている状況を自然なものにする。しかし、「夏だからということもあり」という形で言い切ってはいない。夏だけが理由で怪談話はやっているわけではない。「夏だから」とあるので、実家に帰る、お盆休み・夏休み、というイメージを喚起させる。「ぞくぞく」とあるので、背筋が寒くなる。ブラツキーの話は、怪談話とは違う「ぞくぞく」を感じさせる。「入っていく」とあり、足を踏み入れる動作。後にまいもママの話に入っていく感覚を覚える。「与えてくれる」を「感じさせる」と比較すると、「与えてくれる」と表現されたほうが、こちらが受け身的であることがわかる。

ママは紅茶を入れながら、しばらく考えていた。

食後に紅茶を飲む優雅なファミリイであることが分かる。「ママ」という呼称からも西洋風のファミリイであることが推測される。魔女の家系という特異さを出す工夫だろうか。

死んだ時のこと以外は。

死んだ時とはブラツキーが死んだ時のこと。「は」とあり、そのこと

以外はよく知らない。裏を返せば、その死んだ時の事はよく覚えてい
る。つまり、ママの記憶の中に死んだ時の事が強く残っていて、だか
らまいにブラッキーの事を話す時も、つい死んだ時の事を話してしま
う。その結果としてまいも死んだ時のことを強く印象に残している。

ママは、口をわざときつと結んだ。

口を「きつと結んだ」とあるので、真剣な緊張している表情。直前
の「それでおしまい」という、今までの緊張した雰囲気とはちがう、
拍子抜けしてしまうような（場の雰囲気をもたやましてしまうような）言
葉とは正反対の行動を取っている。「わざと」とあり、意図的に「怪談
話はこれでおわり」ということを表情でも示している。

でも、そうじゃないよって、おじいちゃんが言ったの。

「でも」は逆接の接続詞であるから、その下に続くことばは話し手
の最もいいところである。ブラッキーをかわいがることで、前に
飼っていた犬であるチェリーの思い出が消えていくような気がしてい
るママにとって、おじいちゃんの言ったことばが印象的であったので
あろう。また、倒置法が使われていることによって、「そうじゃないよ」
という一言がより強調される。さらに、おじいちゃんは、ママの長い
悩みに対して一言で返している。そこから、一種の自信が感じられる。
おそらくおじいちゃんは、以前にも犬を飼っていて、ママと同じ気持
ちを味わっていたのではないのだろうか。

**ママは、あれ、学校で何かあったのかな、というような顔をしたが、す
ぐにもとの話題にもどった。**

「ママ」のふとした表情に気付く「わたし」の成長をあらわしてい
ると同時に、学校での話を聞いてほしいけれど、ふれられたくないよ
うな、戸惑いが見え隠れしている一文。「ママ」の表情の変化と話題の
つながりという客観的に見てわかることだけにふれられて、「わた
し」や「ママ」の気持ちや学校で起きたことなど主観的なことには言
及されていないので、余計に作中人物の心情が気になる。「ママ」は「わ
たし」が「ママ」の表情の変化に気付いていることに気付いていない。

**ママは、学校のこと、あまり深入りしたがらないからね、とまいは心
の中で思った。**

親が子どものことを気にかけないわけがない。この物語のまいとマ
マの関係も特殊な例ではないだろう。今回は「学校のこと」と限定
されているが、深入りしないのにはそれなりの理由があるのだろう。
「したがらないからね」といったことから、それは今回だけでなく今
までもそのようであったと考えられる。そして、深いうなずきという
ややオーバーなアクションをまいは行っているのに、ママが何もリ
アクションを起さないことにより、まいは少しあきらめている感じが
ある。

「あまり」とあるので、ある程度は関わってくる。「したがらない」
と「しようとな」とを比べると、意思がない、意欲がないという意
味があることがわかる。「からね」とあり、「から」の後ろには「話さ
ない」などが続くようにとらえられる。まいは実はママに話を聞いて
ほしいのだろうか。「心の中で思った」とあるが、単に「思った」の
ではなく「心の中で思った」とある。前述の「ママは、学校のこと、
あまり深入りしたがらないからね」が発話のように聞こえるからだ

考えられる。声に出して言わないつもりであることが読みとれる。

気にしつつも聞かないスタンスのママ。都会っぽい。何かがきつかけ（ブラッキー）にかかわりすぎて、おせっかいで死なせてしまったこと）で、その反省から深入りしなくなったのだろうか。

まいは、ママについて分析できるぐらいの年齢であり、またママの心理を読みとる、観察力のある子どもであることが分かる。

「学校のこと、あまり深入りしたくない」とあるので、普段から二人は話しているが、ママの方から学校のことについてまいに尋ねたりはしなかった。ただ「したがらない」ということまでまいに伝えるほど、ママがまいの学校でのことに気にはしつつもあえて聞かないというスタンスをとっているように感じられる。

ママは、そうそう、と今まで何度もくり返した話を、うれしそうにまた語りはじめた。

「今まで何度もくり返した話を」とあるので、まいはこれから母が話すことを何度も聞いている。「うれしそうに」とあり、ママは、話す事に対して全く飽きていない。「また」とあるので、ママが嬉しそうにこの話をするのは一度目ではない。

よちよち歩きのまいの横を、つかずはなれず歩いてた。

「よちよち」とあり、まいの足取りのおぼつかない様子が分かる。それに対して「つかずはなれず」とあるので、ブラッキーがそのまいの足取りを邪魔しないように、ペースを合わせて歩いていた様子が分かる。

まいは、その「小さな女の子」がまるで自分と関係ない子のように言った。

よく脱走する子であった「わたし」であるが、今の自分からは、そんなことをしていた様子が想像できない。手間のかかる子であったという事実を、認めたくないのかもしれない。わざと関係のないように言ったのか。もしくは、単純に記憶が無いだけか。

「小さな女の子」と書かれているが、前の文を見ると、「小さな子」と「小さな女の子」の二つの表現が使われていた。この前の文を比較してみると、「小さな女の子」としているのは、母が慌てて外を見えずっと先、つまり遠くにいる子供を見つけたときである。遠くにいるので性別まではわからないため、「小さな子」としているのだと思う。

次に、「小さな女の子」としている前文は、視点が近いため、性別が識別できているのだと思う。ここでの「小さな女の子」は「歩いている」と書かれていて、動作をしている。この一文は、遠くにいて見つけられるまいのことではなく、自分から歩くという行為をしているまいを指しているのではないかと思う。「小さな女の子」より、より具体的にまいを指していると思う。

まいにとってこの話は何度も聞いたことのある話ではあるが、自分の記憶にはないため、「自分」と「小さな女の子」を結びつけていない。

まいはこの話を何度もママから聞き、自分の頭の中にすでに絵として存在している。しかし、実際自分自身の体験としての記憶はないため、その絵の中に自分をあてはめることができない。他の一文から、まいは初めての話なら共感、自分を重ねることができていることがわかる。聞けば聞くほど、自分のことと切り離してしまふ子なのだろう。

それは、たぶん、おばあちゃんの作戦がちだ、とまいはひそかに思った。

この一文から、まいの性格が分かる。この部分は、まいの心の中で思ったことだが、同じような文があり、「ママは、学校のこと、あまり深入りしたがるからね、とまいは心の中で思った。」という文もまいの心の声である。ママとの会話の間によく入るこういう文から、まいはいろいろなことをすぐ考えてしまう。そして、そのことをあまり口には出さない性格だということが分かる。

まいは、ようやくその子が、自分と関係があるように思えてきた。

記憶の片隅にあった、おばあちゃんの言葉などが思い出されて、昔の自分と、今の自分のつながりを認識し始めた。前文に「このところは、初めて聞く話だ」とあるが、なぜ、初めて聞いたのに関係があるように思えるのだろうか。

「思えてきた。」とあり、完全に「思った。」わけではない。最初の部分は、よく聞かされていたため、客観的に、自分とは離れた存在として話ができるようになったが、このところは、初めて聞く話であるので、より一層興味が湧き、自分と関係のある話として聞くようになった。

「わたしの知らない頃の話」であることは変わっていないが、自分、とその子のつながりを感じ始めている。「初めて聞く話」の中にはまいのよく知るおばあちゃんやママが登場し、まいにその女の子のつながりを感じさせたのか。

「ようやく」や「思えてきた」とあるので、まいは今までは、ママのエピソードの中で登場したその子が自分と関係があるように思え

ていなかった。また、「ようやく」には、長い期間、その状態が続いていた印象を受ける。まいはその日の話の中だけでなく、今までママが話してくれたいたブラッキーとのエピソードの中でも「小さな女の子」と自分自身を結びつけることができていなかったのではないか。

まいがママの話に引き込まれている変化の様子がわかる。「その子」とは話の中に登場するまい自身のこと。何度も聞いた話なので客観視できてきたが、知らない話で自分の身体感覚や感情を結びつけている話を聞くことで、自分のこととして身近に感じるようになってきている。

「自分と関係があるように思えてきた」とあるので、「自分だと思えた」と違って、徐々に関係がある人物であると認められるようになってきた。

ママは、わざとコホンとせきばらいをした。

ママの言うことは聞かなかった、という少し自分にとって恥ずかしいような話をしたため少しばつの悪さを感じている。また、ママが話を転換させようとしているのも分かる。まいは、おばあちゃんがニヤリと笑ったことに対して笑ったのだが、ママは自分のことを笑われたと思ったため、ばつが悪かったのか。

次の日からは、それが生き物じゃないってわかったみたいで、ブラッキーが知らん顔するので、ブラッキーこれは何？昨日あんなにほえてたのに、つてからかったら、あら、わたし、そんな物にほえました？つてすました顔をして通り過ぎてたわ。

「次の日からは」ということから、次の日には克服できて、それ

降「迎え」という行為も継続されていた。

「それが生き物じゃないってわかったみたいで」とあるので、昨日精いっぱいママを守るためにほえ続けていたが、ドラム缶が何もアクションを起さないということをブラッキーが理解したと推測している。ブラッキーは賢く、理解力と順応力の高さがうかがえる。

「ブラッキーこれは何？昨日あんなにほえてたのに、つてからかったら」とあり、落差からついついじめてしまうとい心理がママに働き、記述されていないが、ママがニヤニヤしながら言っているということが容易に想像できる。

「あら、わたし、そんな物にほえました？」は、ママが想像で言っているにしろブラッキーのセリフである。「わたし」ということからブラッキーがメスであったことがわかり、「そんな物にほえました」からは、少しお高くとまっていたことが伺える。

「つてすました顔をして通り過ぎてたわ」からはスルーというより、気にはしつつも、これとは関係がなかったという感じがする。

おばあちゃんは、一人になったからつてこたえるような人には思えなかったが、ブラッキーがどんなふうにも死んだか、まいは知っている。

接続助詞「が」を境に、この文は二つに分けることができる。まず前半部を見てみる。ここには、「まいは」という主語が隠されており、重文であるといえる。おばあちゃんは一人になったからつてこたえるような人には、まいは思えなかった、となる。なぜまいは、そのように思ったのか。おばあちゃんは、ブラッキーを信頼していたり、よくものごとを考えていたりするということがある。一人で生活することになっても、大丈夫だとまいも感じたのだ。

後半部はブラッキーの死に方を説明する導入となっている。だが、ここで注目するのは、前半と後半の対応についてだ。接続助詞「が」は逆説の働きであるはずだが、ここでの対比はどこだろうか。まいの「思えない」と「知っている」なのか、「おばあちゃん」と「ブラッキー」なのか。この文章は少し不自然なように感じてしまう。ここでの対比は、副助詞「は」と格助詞「が」があるので、後者の「おばあちゃん」と「ブラッキー」の対比であると考えられる。

おばあちゃんは、一人になったからつてこたえるような人には思えなかったが、ブラッキーがどんなふうにも死んだか、まいは知っている（だから、おばあちゃんはこたえたのではないかとまいは想像した）と補うと、これ以降の「センサーでもう少しは長く生きてだろう。」という箇所がより詳しく説明していることになる。

ママをなぐさめようとしたのか、一生懸命しつぽをふろうとし、首をのばしてママの手をなめようとしたが、もうその力がなく、最後はしつぽがパタンと落ちて、ブラッキーは死んだ。

「一生懸命しつぽをふろうとし」、「首をのばしてママの手をなめようとした」とあるので、どちらも行動しようとしたが、実際にはできなかった。「もうその力がなく」とあるので、二つの行動のどちらをも行う力がなくなつた。

この描写は、ママの語りの描写である。まいの記憶のなかでこの部分だけがスポットライトを浴びたように浮かび上がっている。毎回話をするたびにママが泣くという強烈な印象からも、強く記憶に残っているのではないだろうか。

そういう死に方だったから、ブラッキーがママにうらみをもっていると考えられなくもなかったが、まいにはそうは思えなかった。

ママの主観の入ったストーリーを聞いていながらも、ブラッキーとママの心のふれあいについて、まいは考えを巡らせることができていく。

ママはブラッキーの死に対して引け目のようなものを感じているが、第三者的立場にあるまいが、そうではない、と自らの考えで感じていると示すことで、読み手にもブラッキーとママの絆の深さを伝えることができる。

それから「よし」と大声で言った。

この一文は『ママの言うことをきくとき』の話と合わせて初めて意味を得る。「待て」と「よし」だけは、言うことを聞いていた。だから、「よし」といったのだろう。

『ママは小さな声で「待て」とつぶやいた。』

⇔ 対応している

『「よし」と大声で言った。』

なぜ「大きな声」で言ったのか。これまでのブラッキーに対する甘え（守ってくれていること）や、早く死なせてしまったことに対する辛い気持ちを振り切り、ブラッキーと別れる決心をしたことが、声に現れているのではないか。気持ちに整理がついたことで、声が大きくなった。

パパの方が「冷静な大人の受け止め方」なんだろうけれど。

冷静な大人の受け止め方に「」がついている。このことから、ま

いはこれを強調したい。そして、「けれど。」で終わっていることから心残りが見受けられる。つまり、「冷静な大人の受け止め方」は「冷静」「大人」という点では正しいと感じてはいるが、「けれど。」とあり、何か違う、と感じている。思春期の曖昧さを表現している。

パパの言う「事実」と、心の中で動く「物語」は全然別のものなんだってことにも、まいは気がつきはじめた。

「全然別のものなんだってことにも」という表現は、語り手の言葉というよりは、まいの立場から書かれているようであり、まいが発見したというニュアンスが文中に表れている。また、「も」とあることから、まいが気がつきはじめたことはこのことだけではないことが分かる。

「心の中で動く」から、まいがママの話聞いて心を動かされたということが読みとれる。

パパは黒いかげのことを、ブラッキーの死のことで罪悪感を持っているママの気のせいだと思っている。それが「事実」。人の心の中で動く「物語」とは、黒いかげをママがブラッキーだと思っていること。まいは「なんと、自分に都合のいい考え方、とまいは一瞬あつけにとられたが」とあるように、ブラッキーが成仏できずに今も駅まで迎えに来ていると言うママに、一瞬あつけに取られているが、ここではそんなママの考えを「物語」として受け入れている。

ママ、パパを違う考えを持つ存在として捉え、どちらかを選ぶのではなく両方の考えを認めるような、広い視野を持ち始めた。

二つを混同してはいけなけれど、どちらが自分にとっての「真実」か

は、きっとそのときどき、ひそかに自分で決めてもいいことなんだろう。

「真実」とあり、嘘偽りのない本当のこと。偽りのない物と認識されてきた事柄（事実↓本当にあった事柄）。「きっとそのときどき」とあるので、毎回ではない。「ひそかに自分で決めてもいいことなんだろう」とあり、他人がどのように感じるか、事実がどうであるかは別にして、自分の心の中だけに留めて信じるものは自分で決めることができる。

「事実」と「物語」を混同してはいけない。でも、その二つは、どちらかを「真実」にしてもいいのである。それを決めるのは自分自身であるし、「物語」を真実だと受け入れてもいいのである。

「真実」とは、この場合生き方、とも言い換えられるのではないだろうか。自分の人生で選択を迫られる時、生き方を決めるのは、ひそかに自分で決めるということである。「なんだろう」というあいまいな表現から、まだまい自身は自分の立場に悩んでいるということが読みとれる。

三 考察

(一) 解釈が分かれる原因

1 家族の捕らえ方の違いの現われ

個人の家庭において「母」の役割はそれぞれである。この物語で、母、父はまいの目を通して描写されている。しかし、読者は無意識に自分自身の家族と照らし合わせながら読んでいる。

まいのママの本心を、ブラッキーの話を嬉しそうにする、やや潔癖症である、などの本文の情報を手がかりにして考えてみると、解釈が

分かれるかもしれない。

2 物語の仕掛け

この物語は三人称の語りである。しかし、まいの心情に寄り添った視点から描写をしている。よって、この物語上で語られることの真偽は読者にはわからない。まいが体験を語る上で、自分で物語る際に、過去の情報があいまいになっていること、反発や共感すること、あえて詳細に語らなかったこと、などが物語に影響を与えている可能性もある。読者は、読む行為の中で語り手によって騙されているかもしれない。

ブラッキーの話については、ママの語る話を、まいに寄り添った視点で物語る形式をとっている。どこまでが何度も聞いた話なのか、どこからがはじめて聞いた話なのか、解釈が分かれる。

まいは母の話を聞きながら「ああ、これは自分の話に思えてくる」と思い、徐々にお話に感情移入していく。結果的に、まいはどこからが聴いた話か、自分で見たことか、分からなくなっている。よって、読者もどこまでがまいは何度も聞いた話なのか、どこからがはじめて聞いた話なのか分からなくなり、解釈が分かれる。

(二) 物語の一文読みで解釈が集中する箇所

まいは、ママによって語られるブラッキーの話を、自分と関係がない話のように聞き始めた。しかし、途中から自分と関係があるように思い始める。ママを通じて語られる自分の過去の話では、まいがよちよちと歩き回り脱走することをママはクツクツと笑いながらおかしそうにしている。一方まいはそれを聞いて、自分がブラッキーよりも人間扱いされていないみたいだと、ママの自分への対応に反発している。

その後、話の中におばあちゃんが出てきて、「まいは知らない景色の中を自分の足で歩いてみたかったんだ、しかつちやいけないうって言った」ことやブラッキーがまいを守ってくれたであろうことに対して、ママは苦笑しているが、まいは自分と関係があるように思い始めるのである。このように、このママとまいの反応の違い、対比が見られる。

このような、まいの心境の動きが見受けられる文に読者の目が集まるのは、この反応の差に違和感を覚えるからだと考えられる。なぜ、まいの反応は変化したのか、というところに読者は興味を持つ。

この二箇所以外に解釈が集中するところは、まいのママへの発言、ママとパパへの言及である。

まいは、初めは自分とは無関係であるような態度であったが、ママとパパに対して、「二つを混同してはいけなけれど、どちらかが自分にとつての「真実」かは、きつとそのときどき、ひそかに自分で決めてもいいことなんだろう。」と述べ、自分と家族との関係をじぶんなりに消化しようとしている様子がうかがえる。

注目の集まる箇所は、家族関係に対するまいの心境を表す箇所であるといえるだろう。

(三) この物語が語られた理由

1 ママが語った理由

ママは、語り初めは怪談話を求められて語り始める。しかし、黒い影がブラッキーだと思いつつも気味が悪いわけでない、ただ「思い出してしまふ」と述べている。ブラッキーが死んだ場面を話すときにも泣いてしまふが、まいに何度も話しているのはなぜか。辛いことを話す、という行為は、相手に聞いてもらってつらさを共有すること

に意味があるといえるかもしれない。ママはまいに辛い思い出話やまいの可愛かった頃の話聞いて欲しかったのだろう。死んだ話を何度もしたことに付け加え、今回は今まで話さなかった、おばあちゃんがまいの味方に付いたというエピソードも話していることは、ママが今回話す際にはより詳しく情報を追加していることがわかる。今回まいに話すことで、最終的にママはブラッキーの霊に「好きなところに行きなさい。」と言って、ブラッキーに対する辛い気持ちを消化できた。ママは物語することで、自分の問題を解決できた。

2 まいが語った理由

まいはなぜこの「ブラッキーの話」を語りだしたのか。手がかりとして、物語の流れを確認してみる。

冒頭では、ママとの二人きりの夕食を終えてティータイムを過ごしている。まいは、つい、ぞくぞくとする怪談話をママに求める。ママはすぐ話を終えるが、まいはおばあちゃんの家でみたブラッキーの昔の写真を思い出し、ブラッキーの続きの話を聞こうとする。ここで、おそらくまいはおばあちゃんとの接点やおばあちゃんの話聞き出したという気持ちがあったのではないかと予想される。ママは自分の話を一方的に話しはじめ、学校の話には深入りしない。うれしそうにまいの幼いときの活発な様子、ブラッキーの様子を話す、まいは、客観的に聞いている。

ママはブラッキーが死んだ場面を話すときにいつも泣いてしまふことにも、ママがブラッキーの霊を相手に命令をすることにも動じない。しかし「ぞくぞくつ」とする感覚を覚える。パパにその話しをするが、本気にしない様子から、「冷静な大人の受け止め方」を知る。「この世

のものではない」ことに興味を持ち、ぞくぞくとした話を求めていた
まいは、このブラツキーの話から「おごそかなもの」を感じ取った。
そして、自分にとっての真実を「ひそかに自分で決めてもいい」のだ
と思うようになる、この発見を語ることは、まいの今後に影響を与え
ていくのだろう。ここに語りの理由があると考えられる。